

秋に咲くサクラ・今期は異常開花か？

*前書き、事実・・・花期がおかしい？

秋に入っても新型コロナ（COVIC-19）感染が収まるどころか科や地域の各種行事が殆ど中止となりホームステイの時間が多くなった。春からの習性で、健康を兼ねての近所歩きを続けてきている。そんな中で12月に入って10日、ルート上で2種のサクラが開花しているのを見かけた。この時はこの季節にさくのでどうせ園芸種だろうと一応カメラに収めたが気にもとめなかった。ところが、12月15日高等科の授業で京都御苑に出かけたが、ここでも前記散歩道で見かけたのと同種と思われる桜が5、6本の開花しているのが観られました。

（右の写真の上2枚は散歩道で見かけたサクラ2種、下は京都御苑で見かけたサクラ）

秋に咲くサクラとしては万博公園の自然文化園、北山緑化植物園にある「ジュウガツザクラ」、その開花時期は10月から11月はじめ、秋の花は貧弱で白色系？であったと記憶している。これ等とは違うなぐらいの印象であった。

高等科生の手前、種名（品種名）ぐらひは調べなくてはと「秋から冬にかけて咲くサクラ」で検索したところ京都MKタクシーの「秋から冬にかけて開花する珍しい秋咲きの桜」2020.12.1UPに出くわしました。

この文献の写真から推測すると上、下は「ジュウガツザクラ」、中央はこれとは違うと思われました。でも開花時期に大いに疑問。そこで、数人の方に右の写真をつけて問い合わせを行いました。その結果、高原さんからは「家の近くの立命館大学（茨木キャンパス）に十数本のジュウガツザクラが咲いています。1か月ほど前はたくさん花が咲いていましたが今は花もまばらです。でも、**なぜか幼木は今もたくさん花を付けています。**」、また、笹井さんからは「大仙公園と長居公園の植栽されたサクラ類ですが、**現在花が咲いているのはジュウガツザクラとコブクザクラでした（看板に記載）。**コブクザクラは花弁が白色で、枚数がジュウガツザクラよりも多く、ジュウガツザクラとは識別がつくと思います。」と両者の花の拡大写真をお送り頂きました。さらに、齊藤さんからは、わざわざ京都植物園に出向かれ、同園に植栽されている秋咲き6種の12月の月20日過ぎの写真記録を作成お送り頂きました。以上の各位のご協力から、京都御苑で見られたサクラは「ジュウガツザクラ」であると確信、高等科生にはその旨伝えました。同時に、私の散歩道上のサクラは「ジュウガツザクラ」と「コブザクラク」であると判明致しました。1件落着ですが・・・。

これまで、単純にサクラは春先に咲くもの。「ジュウガツザクラ」などはなぜ秋にさくのか。また、今年なぜ秋咲きのサクラの花期が冬季までずれ込んだのかなど疑問が残ります。そこで、



「秋にサクラの咲くのはなぜ」

「秋咲きのサクラの品種」（及び斉藤さんの京都植物園での初冬の画像を交えて）紹介

「今年、秋咲きのサクラの開花が遅れたわけ」

について暇に任せて記述致してみます。

1. サクラは実は秋咲きだった!？（東京農業大学・知的好奇心へのアドベンチャー VOL.5 より）

サクラは春に咲く。それは昔から変わらない風景のように思われています。しかし「サクラは本来、秋に咲いていた」。「それが理由によって、春に咲くようになっていた」と考えられます。サクラを巡るふしぎな物語を、ご案内します。

*先祖の影

サクラは昔、秋に咲いていた。

日本には数百種類のサクラがありますが、ソメイヨシノに代表されるように、そのほとんどが春に花を咲かせます。でもわずかに数品種ですが、秋に咲くサクラもあるのです。10月から11月にかけて花を咲かせるフユザクラ、ジュウガツザクラなどです。

ここに「サクラは本来、秋に咲いていた」という仮説を裏づけるヒントが隠されています。秋に咲くのは、突然小春日和が続いたことで、サクラが春になったと勘違いしてしまう「狂い咲き」、あるいはホルモンの変化によるものなどといわれてきました。

しかし、本当にこうした狂い咲きのたぐいなののでしょうか？秋咲きのサクラは、ネパール地方にもあります。「ヒマラヤザクラ」という種です。秋咲きという点だけでなく、花が散らずに、樹にへばりついてしぼんでいく点など、日本の秋咲きのサクラといくつかの共通点があります。実は、日本の秋咲きのサクラは、ネパールのサクラと関係しているのではと、私たちは仮説をたてたのです。

日本のサクラとネパールのサクラの遺伝的な特性を知るため、染色体を調べてみると、16個の染色体数をもつ野生種であることが解りました。

また交配実験でも授粉した花数に対する結実率は30~50%と良好な成績でした。このことから日本のサクラとネパールのサクラは遺伝的に非常に近い関係にあることが解りました。そして、日本で秋咲きのサクラが見られるのも、「狂い咲き」などではなく、「先祖返り」による可能性が高いのです。先祖返りとは、人間が類人猿から進化した名残りとして、ときどき尻尾が生えて生まれてきたり、乳房が三つあったりすることがあるように、先祖がもともと持っていたものが何かのきっかけで出てくる現象のことです。

つまり、日本の秋咲きのサクラは、そのルーツであるヒマラヤザクラの先祖返りというわけです。

*眠るサクラ

もともと秋咲きだったサクラが、なぜ日本では春咲きになったのでしょうか？その秘密は、ネパールと日本の気候の違いにあります。



秋咲きのサクラがあるネパールは、緯度は亜熱帯に属し、山岳地帯を除けば標高は1400～2000mほど。一年を通して温度差は少なく、とても穏やかな気候です。これに対して日本は、春夏秋冬がはっきりしていて、一年でも最高と最低気温の差が30度以上あります。ネパールと比べると、とても厳しい気候なのです。

つまり、温室育ちのネパールのサクラは、中国、台湾、日本へと北上していく過程で、厳しい気候を乗り切る手立てとして、冬場に葉を落として活動を止める「休眠」を得たのです。動物でいえば冬眠です。そして暖かくなった春に、花を咲かせるようになったのです。

「そんなことがあるわけない」と思われるかもしれませんが、でも、次の事実は非常に示唆に富んだ話です。

ネパールには秋咲きのヒマラヤザクラのほかに、2種のサクラがありますが、実はこの2種とも春咲きなのです。なぜでしょうか？

この2種のサクラは、ヒマラヤザクラと違い、雪が降り気温も零下にまで下がる標高3000m以上のところにあります。そうです、この2種のサクラも、厳しい環境で生き残るために休眠を獲得して、春咲きの性質に変身していったと考えられるのです。

その昔、サクラは秋に咲いていた。それが厳しい環境へと移動していくなかで生き残るために眠ることを覚え、春に咲くようになった。毎春、爛漫に咲き乱れるサクラを見ながら、私たちはそんなサクラのふしぎな物語に、想いをはせているのです。

植物の進化を遺伝子レベルで解明していくのも農学のおもしろさです。

*上記の出典は、1個人の投稿ではなく、大学が進化論から解き公にしている文献です。ただ上記の説明で日本の秋咲きのサクラは多くは春にも咲き、むしろ春の方が花は多くつく理由など分からないこともあります、ご参考に。

2. 秋に咲くサクラ

2-1. ヒマラヤザクラ

・中国雲南省、ネパール中部、インド、ブータンなどヒマラヤ近くの高山地帯やミャンマーを原産とするバラ科の落葉高木。

・ヒマラヤザクラが日本へやってきたのは昭和43年5月のことで、当時、皇太子であったネパール国王が熱海を訪れた際、熱海植物友の会から当地のサクラとウメの種を献上され、その返礼として種子を贈ったものが全国に広がったとされる。

・開花は11月下旬～12月上旬。雌雄両性の花は直径1センチほどで5～12輪ほどがまとまって咲く。一重の大輪だが画像のようにシベが長く突き出るためゴージャスな印象を与える。花の色は個体や環境によって濃淡があり、白、ピンクまたは深紅となる。開花は他に花の少ない時期であ



り、この蜜を求めてムクドリなどの野鳥が集まる。

・花の後には直径1～1.5センチほどのサクランボができ、緑、黄色、赤と色を変えながら翌年3～5月に熟す。このサクランボは生で食べることができ、これもムクドリやメジロなどの野鳥が好んで食べる。種子を蒔けば発芽するが、発芽までに1年半以上かかることある。

近くでは、長居植物園で見ることができます。

2-2 ジュウガツザクラ (十月桜)

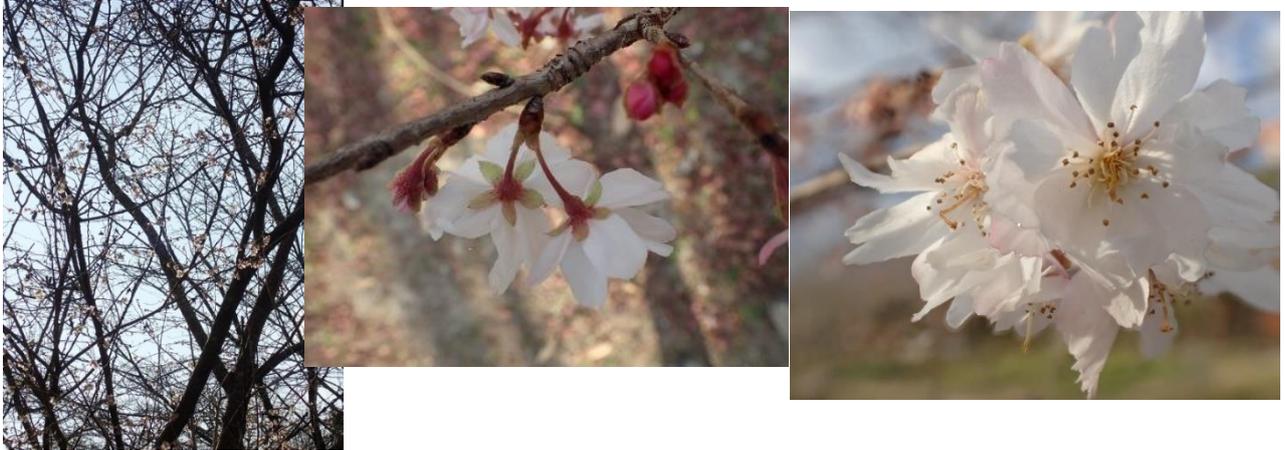
・バラ科サクラ属の小高木。エドヒガンとマメザクラの交雑種であるコヒガンザクラを原種として江戸末期に作られた園芸品種であり、野山に自生はない。

・秋の開花が特に人目を惹くためジュウガツザクラと呼ばれるようになったが、実際の開花時期は9月下旬～4月上旬頃で、氷点下になるような厳冬期以外は断続的に咲き続け、春季には最も多くの花を咲かせる。他のサクラに埋もれがちだが、春に咲く花の方が花弁が大きい上に独特の振れがなく綺麗である。

・花色は白のものが多いものの、淡いピンク色や濃いピンクのものもある。また、蕾はピンク色が基本であるため、白花種でも全体的にピンクがかかって見えることが多い。

・花の直径は1.5～3センチ前後で3～5輪がまとまって咲く。原種のコヒガンザクラは一重だが、ジュウガツザクラは八重(あるいは半八重)で、花弁は5～20枚あるのが普通。オシベは黄色くてよく目立ち、1本しかない雌しべは雄しべよりも長く突き出るのが特徴。花の後には稀に実(サクランボ)ができる。

*十月桜 (京都植物園・2020.12.22)



2-3. コブクザクラ (子福桜)

・バラ科サクラ属の落葉小高木。フユザクラとして総称されるサクラの一種であるが、花一輪につき2～3個のサクランボがなるという特性を持つ。これを子宝に恵まれたものとして「子福桜」と名付けられた。人為的に作られた栽培品種であるがその来歴には、①カラミザクラとコヒガンの交配種、②シナミザクラとエドヒガンの交配種、③シナミザクラとジュウガツザクラの交配種などの説がある。



開花期間はジュウガツザクラなど同じように秋から春（10月上旬～3月上旬）であり、厳冬期を除いて断続的に開花するが、春の花が最も多く美しい。

・花は直径2～3センチほどの白い八重咲きで、ジュウガツザクラよりも一回りほど小さい。20枚以上ある丸い花卉の縁に切れ込みがあること、花卉の一部がほんのりとしたピンク色を帯び、時がたつにつれて花の芯の部分が赤くなるのが特徴。

・花には雌しべが複数（1～8本）あり、これが子宝につながる。一般に八重咲きのサクラには実がほとんどできないため、本種が注目されるが、寒風にさらされて結実しないことも多い。（今年は、秋季の気温が高かった為か、一花から2個の結実もみられました。1月6日京都植物園で・斎藤さん → ）

*子福桜（雌蕊複数ある。写真では結実が見られ、葉芽が展開始めている。）



2-4. 四季桜

四季桜は、白色で一重咲きの中輪の桜です。野生種であるマメザクラ（豆桜）とエドヒガン（江戸彼岸）の種間雑種と考えられています。

冬桜も四季桜と同じような花を咲かせますが、本種はがく筒がつぼ型をしている点が異なります。

春夏秋冬の四季を通じて咲いている桜という意味で四季桜と呼ばれています

*四季桜（果実が多く見られました）



2-5. 不断桜

不断桜は、サトザクラの園芸品種。花は白く一重で径三センチメートルぐらい。春秋に長い柄のある花を開き、冬も成葉が残り、花が咲きます。

10月頃から翌年の5月頃まで花がみられ、1年中、花や葉が絶えないことからこの名がつけら

れたといわれています。野生種であるヤマザクラ（山桜）とオオシマザクラ（大島桜）の交配種と考えられています。三重県鈴鹿市の子安観音に、樹齢600年とも言われる不断桜の原木があります。原木は、「白子不断桜」として国の天然記念物に指定されています。

（京都の多くの寺院では「不断桜」として植栽されているが実際は「十月桜」であることが多い？）

***不断桜** （ 上部に花が残り葉の展開が早い ）



2-6. 冬桜

・本州を原産とするバラ科の落葉高木。来歴には諸説あるが、一般的にはヤマザクラとマメザクラが自然に交配してできたものとされ、伊豆半島と房総半島には自生も見られる。

・開花期は11～12月と4月の年2回であるが、その間も細々と咲き続ける。

・冬に咲く花芽は全体の3分の1であり、残り3分の2は春に咲く。春に咲く花の方がより大きくて見応えがあるが、春の開花期には新葉が展開しており、木全体が花だらけというわけにはいかない。

・花は一重で咲き始めは薄いピンク、後に白色になるのが普通。花の直径は3センチ前後で花弁は5枚、花柄は短く、寒気が強くなると花弁は枝に張り付くように萎む。秋に咲く花には実がならないが、春に咲く花には実がなり、これを蒔けば増やすことができる。

・フユザクラの葉は長さ5～6センチほどであり他のサクラ類に比べて小さいため「コバザクラ（小葉桜）」という別名がある。小さな葉の割には縁に大きなギザギザがあるのが特徴。

埼玉県児玉郡の城峰公園、愛知県名古屋市の庄内緑地公園、群馬県藤岡市の桜山公園などの名所がある。特に桜山公園のフユザクラは「三波川の冬桜」として名高く、国の天然記念物に指定される。

・*冬桜 （本種でも花のあと結実がみられた。小葉桜と呼ばれ江戸時代から栽培）



2-7、エレガンスみゆき・・・正体不明の秋冬咲きの桜

京都府立植物園に2018年に導入された新しい桜とのことです。濃紅色の八重咲きでやや下向きに咲く秋から開花する桜です。見た目も珍しいですが、なんといってもネーミングがユニークです。この桜は、そのネーミングの由来はもちろん、どういう系統の桜なのかもよくわかりません。

ネット上ではニワウメ（庭梅）とニワザクラ（庭桜）の交配種とされている情報が多いのですが、さすがに眉つばです。

*エレガンスみゆき (埼玉県川口市の柴道氏の作品)

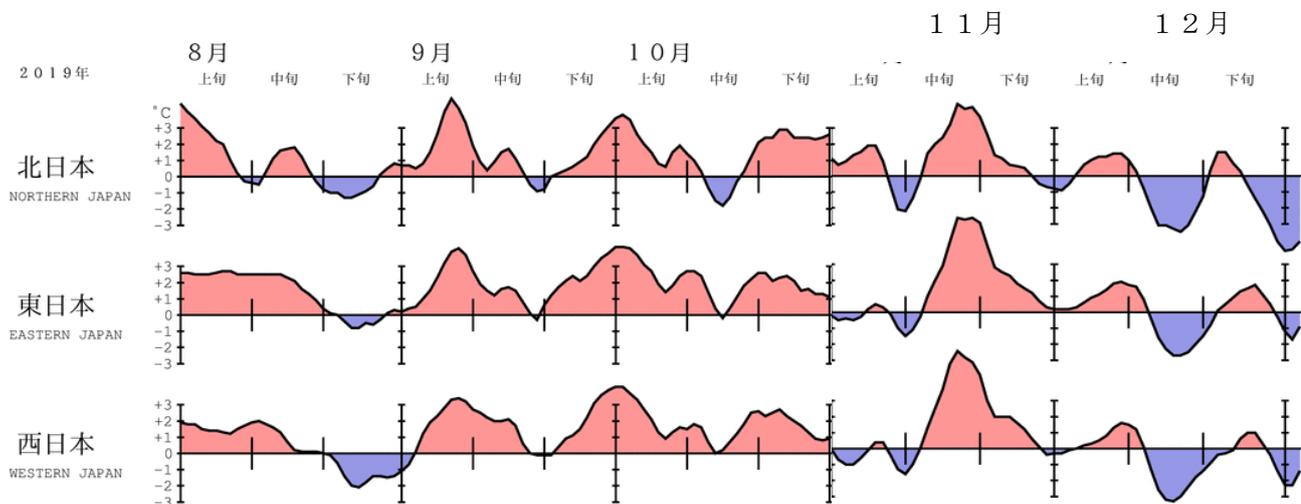


*以上7種の秋咲きのサクラは京都植物園には植栽されているとのこと、今期はもうオフシーズン。来期は花期を見定め、訪問したいものですね。(年末、年始2度も植物園に足を運ばれ、情報の提供頂いた齋藤さんに感謝！)

3. 今期秋咲きのサクラの開花が遅れた理由は？

一般に樹木の花の開花はその年の気温に左右されます。春咲きの花は開花前の気温が高いほど早く咲きます。一方、秋に咲く花は逆に涼しさを感じて咲く花が多いようです・・・よく知られているのがキンモクセイの開花、山上から麓へと開花が進みます。下はこの秋の気温の傾向を平年に比べたもの。

2020年夏から秋にかけての気温の推移 本州-1



われわれの関係する西日本の気温のこの期間の推移は上図の通りであり、9月、10月は平均すれば2℃

程度高めの気温となり、さらに11月初旬平年より若干低目となったが、11月中旬以降～12月初旬は再び気温がかなり高めに推移した。個の為、自然界でも紅葉・黄葉の遅れ、ウメや蟠梅、ボケなどの年内開花など異変が生じました。また、別報2で記述したソメイヨシノのサクラモミジもこの影響を被り12月中旬まで紅葉をのこしたのも本格的な冷え込みが遅れたからでしょう。

一方、本報で取り上げた「秋咲きサクラ」も少なくとも秋の開花は、涼しさを感じて開花する種に属するらしく9、10月の気温高、さらに11月中旬以降の異常と思われる気温に花期を狂わされ、12月の開花となったのでしょうか。さらに、12月後半の冷え込みが花の寿命を延ばして来ていると考えれば何となく納得はできるのですが・・・。

このような、秋咲きのサクラの多くは再び春期にも開花します。事実、今開花している「ジュウガツザクラ」でも立派に硬い「冬芽」をもっているのが分かります。(右の写真)

以前に勝手な推測から、ソメイヨシノの花芽の「休眠打破」について少なくとも1本の樹では打破されるとされる「低温」と「期間」は同じであるのに、実際には「打破」の時期が異なってくる。この理由として「休眠」状態をつくり出すとされる、アブシジン酸の量が一定ではなく芽によって多、少の差がありこれによって「休眠打破」の時期に差が出てくるのではないかと記した。その典型的な例が「ジュウガツザクラ」だとしたが如何でしょう。



サクラについては、「休眠化」「打破」さらに打破後の開花・展用などまだまだ分からないメカニズムが多々あります。

というわけで今年もサクラ観察を続けて行きたいと思っています。

皆さまの参画大歓迎！お近くでの開花情報、疑義、質問などお寄せください。

*余談ですが、私の散歩ルートの「ジュウガツザクラ」や「コブクザクラ」は比較的若い樹であるせいか、いまだ盛んに花を咲かせています。さらに温暖化が進めばそのうち「正月桜」あるいは「クリスマスチェリー」などと改名が必要？

両桜は今も開花の状況が続いています。マイ散歩道にある芦屋市の岩園天神社への初詣時にスナップ。次頁の新春のあいさつ状にはめ込ませて頂きました。本当は天満宮ですから“梅”でしょうが…。

ご参照下まで。

以上



謹んで
初春の
お慶びを
申し上げます



新年早々のお騒がせです。2日、近所の神社(芦屋・岩園天神社)に初詣。その時のスナップ写真。

参詣途上で何とまだサクラが咲き残っているのに出くわしました。

上方の2枚は「子福桜」(1本)、下方は「十月桜」(2ヶ所で開花)だと思います。

地球温暖化で桜の開花もおかしくなっているようですね。

